会報No. 448

子どもの本 研究会

【私の一冊】

『人間の大地』サン＝テグジュペリ／作　山崎庸一郎／訳（みすず書房）

芦田徹郎

大学を退職して6年以上が過ぎ、今年喜寿を迎えた。社会的な責務の大半から解放されての気楽な隠居生活である。とはいうものの、毎日、家人の仕事の送り迎えや家事のまねごと（料理はしないので大したことはない）とカフェ通いでけっこう忙しい。

もう一つ大事な日課に、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』を読み返し、関連資料に目をとおし、メモをとるという作業がある。ついつい夢中になって送迎も家事も忘れてしまい、お叱りを受けることもある。いまさら誰に頼まれるわけでも、なんの業績や稼ぎになるわけでもないが、ただ楽しく、大学の研究紀要が投稿を認めてくれるので、ここ数年は『星の王子さま』論を毎年一編まとめている。

王子さまは「生きるということ la vie」についての探求と学びの旅を続けるが、これは、同じ著者による他の著作にも共通するテーマである。なかでも、『人間の大地』は、人間が「生きる」とはどういうことなのか、全編その端々から重要な示唆を与えてくれる作品である。飛行家でもあったサン＝テグジュペリは、『星の王子さま』の作品中の語り手である飛行士「ぼく」と同じく、アフリカの砂漠に墜落したことがあり、この本のなかでその生きるか死ぬかの経験を書いている。

生還を期しがたい絶望の淵にあって、同乗員のプレヴォーが「この世にわたしひとりだけだったら、このまま寝てしまいますよ」と言う。自分が天涯孤独なら、助かるために苦しく見込みのない悪あがきをするより、このまま死んだほうが楽だ。しかし、プレヴォーは、そうではなく、帰りを待ってくれている大切な人がいるから、なんとしても生きて還る、と言っているのである。

それは、ナチスの強制収容所での過酷な体験をもとに、極限状況にあってさえ「待っている仕事、あるいは待っている愛する人間、に対してもっている責任を意識した人間は、彼の生命を放棄することが決してできない」と書いたフランクル（霜山徳爾訳『夜と霧』みすず書房）に通じる人間観である。

生きることにさして不安のない平穏な日常生活でも、それをよく生きられるかどうかは、待っていてくれ、呼びかけてきてくれる人や為すべきことがあるか否かにかかっているように思われる。

（甲南女子大学名誉教授・熊本大学元教授）

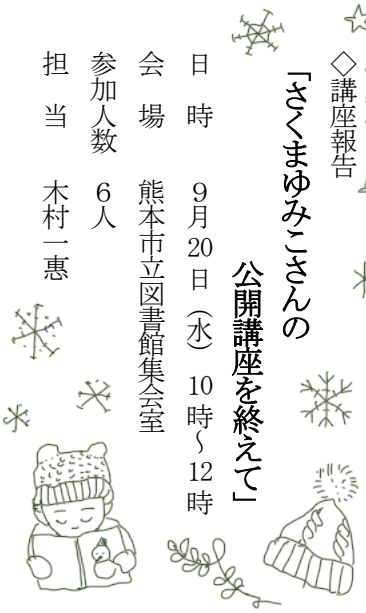
2023年11月18日（土）特定非営利活動法人　熊本子どもの本の研究会　発行

https://www.kodomonohon.org　E-mail: info@kodomonohon.org

◇講座報告

「さくまゆみこさんの公開講座を終えて」

日　時　9月20日（水）10時～12時
会　場　熊本市立図書館集会室
参加人数　6人
担　当　木村一惠



当初予定していた〈田口祐子さんを迎えてのおはなし会〉が中止となり、講座内容を「さくまゆみこさんの公開講座を終えて―それぞれに思うこと・考えること」に変更した。

会報報告を担当した木村さんが〈テープ起こし〉からの作業と公開講座概略について発表する。

〈テープ起こし〉によって3万3000字余りの字数となった文章を、少しずつ削る作業を繰り返し、最終的には2900字余りにする。その時、心がけたのはさくまさんの〈はなし言葉〉が持つトーンや雰囲気を生かすことである。また、何を削り、何を残すかも重要であるため、読み返しながらポイントを絞っていく。さくまさんが、会場に並べられた販売用の本の紹介もされ、その内容も書きたかったが、字数の関係上省かざるを得なかった。しかし、本題中に取り上げられた本は、会報を読んだ方が手に取ってもらえればと思い、省くことなく本のタイトルと出版社だけは記した。今回の講演では、大人の事情（出版社など）よりも子どもの未来を考えて行動する、さくまさんの一貫した考えや姿勢を感取した。更に、翻訳するに当たって妥協を許さない徹底した調査に感心し、さくま訳は信用できると思った。

〈参加者の感想〉筋が通って芯がある。自分の優柔不断さを反省▼良い話だったの一言。可哀想だという視点で終わらない為、読者に希望を感じさせる手法を用いている▼いじめる子の側から描いた作品の一文、「みずに　おとされたちいさな　いし、ひろがる　さざなみ・・・やさしさも、これとおなじなのです」は心に響く。優しさを波紋に例える描写が余韻を残す▼さくまさんの活動の根底に〈子どもを大事にしたい〉思いがある。私もその思いに沿って活動したい▼『エンザロ村のかまど』の見開きにさくまさんの似顔絵があり、作中の一人として入り込んでいる。この姿勢が民族の文化や心をおさえた作品を生み出している▼さくまさんが持つ冒険心は子ども時代の環境から育まれたものではないか▼立つ位置を持ち、世界を広げていける方▼文化的面から命を救っている姿勢や膨大な仕事量に感動と尊敬▼作品を読み、疑似体験することで、読者は経験を蓄積し多様な視点を身に着ける。

〈講演会アンケートより〉提出者24名全員、講演内容に〈満足〉を選択▼自分の知らない世界が開けてくる面白さを知り、翻訳された本を読みたいと思った▼読んでみたい本が広がった▼『この計画はひみつです』を読み、核の研究を絵本で表現した事に驚き、感動。絵本の見方が変わった▼わかりやすい語り口であっという間の講演会だった▼日本と外国との違いを強く感じた▼「窓を設けるのは大人、開けるのは子ども」は子どもの〈生きられる、生きる力〉に関わり、心に留めておきたい言葉▼多様性の受け入れが重要▼さくまさんの社会的な活動と情熱に感動▼本は「今ここに」縛られている子どもたちの苦しみを救う「窓」であると実感▼児童書がe-Bookになることで、著者や翻訳者の困難がどう変わるのか、読み手のアクセス・理解の変化も気になった▼作者や翻訳者

の主張を伝えるためには丁寧な読みと視点が重要。これは子ども達に本を届ける者として大切な事▼学校や図書館司書の多様性に対する姿勢が大切▼日本語より英語の育成を重視している教育現場に憂いを抱く。

（報告　堀畑真紀子）

◇講座報告

子どもの本とは？
―大人の本と比較して

日　時　10月18日（水）10時～12時
会　場　熊本市立図書館集会室
参加者　8人
課題本　昔話・絵本の『かちかち山』
　　太宰治『御伽草紙』「カチカチ山」
担　当　堀畑真紀子

この昔話は、狸が婆さんを殺して婆汁を作り、爺さんに食べさせ逃げる話と、兎の仇討ち話がそれぞれ独立していた。その後、この二つが統合され一般的な『かちかち山』となる（柳田國男説）。主人公が何故兎なのかは、動物の中でも知恵を持つ存在、世界共通の観念が背景。絵本では婆汁を爺さんが食べる場面を問題視する。小澤俊夫再話『かちかちやま』はその場面を描くが、大半の絵本は省く。小澤はこの昔話が「①動物同士（人間と動物）の命をめぐる食い合いの物語　②人間が自然の世界を侵略している物語　③究極の仇討ちの物語」で「日本人と自然との関係の基本的な形とその歴史を語っている」として、婆汁の場面を描く。一方、省いた絵本にはカニバリズム（人肉を食べること）を連想するという教育的配慮がある。赤津純子の調査（２００８年）から①４歳から５歳児48人に読み聞かせをしたところ、話が長いため仇討ちの話の印象が強く、婆汁の箇所は余り覚えていなかった。②大人に粗筋を問うたところ仇討ちの話のみを記憶している人が多い、という結果がでた。赤津はこの話の「伝承的内容」について、排除や意味を明確にせず「幼いころからさりげなく潜在意識の中に」入れておくことが大切と主張。

太宰「カチカチ山」は、語り手である「作者の私」が狸に寄り添い物語を展開させるが、最後の泥舟もろとも沈んでいく場面で狸を突き放し、作品を喜劇へと変換させる。語り手の狙いは、兎の執拗で残忍な復讐行為の理不尽さを浮き彫りにすること。兎は16歳の潔癖で純真、残酷な美少女。狸は37歳の色黒男、食い意地の張った愚鈍で自己中心家、一番の関心事は食欲と色欲を満たすこと。兎の仇討ちは、狸の色欲につけ込み山へ柴刈りに誘い、狸に大火傷を負わせ、その後「色黒」に効く「仙金膏」を火傷の痕に塗りつけることで終わる。しかし、狸が色欲から兎を訪ねたことで「醜悪な愚鈍なもの」に対する兎の嫌悪感は強まり「悪魔の一計」を案出。兎は狸の色欲と食欲を利用し河口湖畔に誘う。泥舟もろとも沈んでいく狸は「惚れたが悪いか」と言って「ぐつと沈んでそれつきり」となる。狸や兎の「言葉」の空虚さと空回りは、「言葉」による他者との隔たりと解釈でき、当時の戦争を美化する言葉への不信感でもある。太宰版と昔話との違いに描写がある。共有体験の中での口承文芸、昔話は人物の行動を語る。太宰版は行動する動機と心理、情景を描く。絵本は、読み聞かせと一人読みを前提とし、黙読訓練が十分でない子どものために人物の行動を中心に描く。以上より、子どもの本の特徴は①教育的配慮　②描写を少なくし人物の行動を中心に描く　③人生を肯定的に描く　と考える。

（報告　堀畑真紀子）

〈参加者の感想〉

婆汁や兎の狸への仕打ちは残酷だが昔話らしい話。これらの残酷性のため、学校での読み聞かせをためらうとの意見もあった。けれど実際に小学校5年生に読み聞かせている人は、これまで先生や児童から問題視されたことはなく、ストーリーを楽しんでいるとのこと。「前半の内容を子どもが忘れてしまう（赤津調査）」のは、読み聞かせ時の子ども達の反応と重なる。教訓的にとらえずに昔話として楽しめば良い。「ふなばた（船の左右のふち）」など知らない言葉が使われていても昔話なら楽しめる。絵本では、松谷版（ポプラ社）と赤羽版（福音館）を比べてみると、表現の違いが分かりやすく、自分の好みが浮き彫りになるとの感想もあった。昔話に対して、太宰治の「カチカチ山」の兎は残酷な詐欺師を思わせる。戦時中に描かれた作品であり、解説から重層的な世界観を感じた。昔話を素材として、兎と狸の善悪や最後のパロディ風の終わり方など、作者の天才的な作品として評価できる。参加者は昔話、絵本と小説の違いに納得し、それぞれの意見を自由に交換することができた。

（報告　安田晶子）

◇報告

オンライン講座「グリム童話の魅力」

日時　8月27日（日）10時～12時

講師　竹内識晃（東京家政学院大学非常勤講師、熊本子どもの本の研究会会員）

参加者　5人

〔講師から〕

昨年の「グリム童話の魅力」ではグリム兄弟の業績を紹介し、『グリム兄弟によって集められた子どもと家庭の童話集』（通称「グリム童話集」）は研究方法の違いによって様々な読み方ができることをお伝えしました。

今回から、グリム童話から1話を選び、その話を丁寧に読み解き、その魅力をお伝えします。

『グリム童話集』第7版（１８５７年）には全部で２１０話が収められています。内容は、昔話２００話と子どものための聖者伝説10話です。グリム童話はグリム兄弟が話を集めたもので、グリム兄弟が創作した話ではありません。

講座では比較民話学の観点からグリム童話21番「灰かぶり」を取り上げました。「灰かぶり」は主人公の通称で、英語名は「シンデレラ」です。

講座の前半は、講師が重要だと考える場面を精読しました。グリム童話の「灰かぶり」のように同じ話型の話がある場合には、昔話の比較が可能です。今回は、ドイツの昔話とフランスの昔話を比較することにしました。

シャルル・ペローの『過ぎた昔の物語ならびに小話』（通称「ペロー童話集」１６９７年）の「サンドリヨンまたは小さなガラスの靴」、レオン・ピノーの『ポワトゥー地方の民話』（１８９１年）の「灰かぶり」を読み、グリム童話の「灰かぶり」と比較しました。「サンドリヨン」は「灰かぶり」という意味のフランス語で、ポワトゥー地方はフランスの西部の地域です。

グリム童話の「灰かぶり」とフランスの類話２話を比較しますと、「はしばみの木」「ガラスの靴」「妖精」「魔法の杖」など、それぞれの話の違いがはっきりします。

グリム童話２１０番「はしばみの枝」（子どものための聖者伝説）を読みますと、はしばみの小枝が民間信仰で重要な役割を果たしているのがわかります。

「灰かぶり」の類話では「継子が女主人公」「残酷な継母」「超自然的な援助者」などのモチーフが部分的に対応しています。日本の昔話では「糠福米福」が「灰かぶり」の類話です。

各国の昔話を読んでいますと、自分が読んだことのある昔話の類話に出会うことがあります。読書で類話に気づくのは、昔話を読む楽しみの一つです。

日本の古典にも継子話はあります。平安時代の『落窪物語』、鎌倉時代の『住吉物語』、『御伽草子』（渋川版）の「鉢かづき」などです。

講座の後半は、参加者と意見交流しながら、質問に応じる形で進めました。参加者の皆様の中には、グリム童話の「灰かぶり」をはじめて翻訳で読まれた方もいたようです。今までイメージしていた「シンデレラ」とは違うことに驚かれた方もいたと思っています。私たちがグリム童話に、はじめて出会うのは絵本などの再話された文章やアニメーションによることも多いからです。

なお、今回は講座の後半を参加者の意見交流の時間としたため、「灰かぶり」の絵本には触れられませんでした。講座に参加された皆様がグリム童話の魅力の一端に触れていただけたのなら、講師として嬉しく思います。今後の講座でも、参加者の皆様と一緒に話を読み、意見交換することで、グリム童話に対する理解を深めていけたらと考えています。

（報告　竹内識晃）

〔参加者から〕

・私達がディズニーなどで知っているシンデレラ物語は、グリム童話（ドイツ）の灰かぶり（シンデレラ）とは随分内容が異なり、ペロー童話（フランス）のものに近いことを初めて知った。グリム童話のシンデレラが、単なるいじめられっ子ではなく、小鳥に相談して仕事をさっさと片付けたり、舞踏会用の服装や馬車を用意したりする魔女的であるところも印象的だった。魔女的であることへの評価など、当時の人々の社会通念に興味が湧いた。

・王子が舞踏会から去っていく「灰かぶり」の素性を調べるためにあらかじめ階段に塗っておいた物質を「チャン」「タール」「やに」などと表現が違うことについて、講師から翻訳者によって「Pech」の訳語が異なることがあると説明を受けた。「灰かぶり」の類話で最古のものは８６０年頃。中国の『酉陽雑俎』に掲載されている。他にもインド、アラビア、アフリカ、南米等にも広がっているそうだ。研究者の昔話の発生や伝播についての関心によって国際比較が始まったとのこと。熊本の県北に伝承されている「ぼんさらや」（志岐有子再話・福吉里加子切り絵・熊日情報文化センター）と類似していることを不思議に思っていたとの質問に対して、『日本昔話通観』や古典の『落窪物語』や『住吉物語』もご紹介いただいた。グリム童話の新たな魅力に気付かせていただいた有意義な時間だった。

・『グリム童話集』（岩波書店）を読み始めたところだったので、興味深くお話を伺った。読み聞かせをやっているが、グリムのお話は、あまたの絵本等になっている。「灰かぶり」を通して、グリム童話への理解を深める事ができた。昔話の持つ息づかいを大切に、子供たちと楽しんでいきたい。

・「灰の中に寝る」ことや「はしばみの枝」が何を象徴しているかが講師の説明でよく理解できた。灰の近くが暖かいからという理由以外に、「不幸な者が灰の中に座るのは太古からの習慣である。異国の者として援助を懇願しアルキノオス王に語りかけたオデュッセウスは、灰の中に謙虚に座るが引き上げられる」とグリムの「原注」にあり、「灰」が明るい場へ連れ出される象徴であることを知った。また、グリム童話の中の聖者伝説に、聖母マリアが森でヘビに追われたさい、はしばみの茂みに隠れて難を逃れた話があり、マリアが「今

回私を守ってくれたように、将来他の人々も守ってもらいましょう」と言ったとのこと。海外の小説では、はしばみの木が時々登場する印象がある。今回の講座を聞いて、他の小説ではしばみに出会う楽しみができた。

〔講師追記〕

「ぼんさらや」の昔話は、『日本昔話通観』第24巻に、典型話として山鹿市の「盆皿や盆皿や」が収録され、類話として熊本県の昔話が12話収録されています。

◇ボランティア「びわの木」活動報告

・10月21日（土）熊本市立図書館
対象：小学生
参加人数：子ども8人　大人5人

・10月25日（水）河内小学校
対象・人数：4年生（34人）5年生（19人）
6年生（25人）

・10月28日（土）熊本県立図書館
対象：幼児・学童
参加人数：子ども4人　大人6人

・10月30日（月）熊本大学教育学部附属支援学校
対象・人数：中学生（17人）

・10月31日（火）河内小学校
対象・人数：1年生（28人）2年生（18人）
3年生（29人）

♡♡♡

今月もおはなし会で多くの出会いがありました。

図書館のおはなし会では、1歳くらいの子どものお母さんが、帰るとき「30分は無理かと思ったけれど、楽しむことができました」と言われました。毎回おはなし会を楽しみに来られる大人の方もいらっしゃいます。

熊本大学教育学部附属支援学校では、いつもの担当者（倉岡さん）の欠席をとても心配する子がいました。おはなしを一緒に楽しむだけではなく、こんな心優しい姿に接することもできました。

読書週間にあたり、今年もおはなし会の依頼をうけ、2日間に分けて河内小学校にも行ってきました。ここでは、授業の時間を使って学年ごとにおはなし会を行いました。子ども達はみんな素直で、よく聞き、大声で笑い、唱えたり、歌ったり、手遊びしたりと、全身でおはなしを楽しんでくれました。こういう機会をいただいたことに感謝し、これからも子ども達のために、おはなしを大切に届けて行かなければならないと思いました。

（報告　古上美智代）

◇今後の「おはなしボランティア」日程予定

・12月2日（土）11時～11時20分
熊本市立図書館（3歳児以上）

・12月11日（月）13時～13時半
熊本大学教育学部附属支援学校（中学部）

・12月21日（木）11時～11時20分
熊本県立図書館（1・2歳児）

・12月21日（木）13時半～14時
熊本大学教育学部附属支援学校（小学部）

・12月23日（土）14時～14時20分
熊本県立図書館（幼児・学童）

・2024年1月15日（月）13時半～14時
熊本支援学校

◇報告　第4回研究会活動検討会

日　時　10月8日（日）10時～12時
場　所　オンライン会合
参加者　4人

前回（8月20日）以降の活動状況を確認。研究会設立40周年記念公開講座については、実施を通してスタッフが気づいた改善点などに

ついて情報共有。びわの木文庫の利用者やオンラインイベントへの参加者を増やす方策について意見交換。次回の研究会活動検討会は12月17日（日）開催に変更。

◇報告　**「びわの木文庫」利用状況**

10月7日（土）　子ども2人　大人1人

借りられた本のリストをホームページに記載しています。ご参照下さい。

・今後の文庫開放予定日

11月18日（土）13時～15時

12月16日（土）13時～16時

皆様のご来訪お待ちしています。

「講座・読書会」参加者募集！

○「子どもと大人の読書会」

日時　12月10日（日）10時～12時

場所　オンライン方式

子どもたちが課題図書を決め、読んで感じたこと、好きな登場人物、お気に入りのフレーズなどを語り合っています。参加者の感想を聞くことで読書の楽しみがさらに広がりますよ。今回の課題図書は以下のとおりです。

（担当　興津暁子）

・小学生の部

『僕は上手にしゃべれない』　椎野直弥 著（ポプラ社）

・中学生の部

『トム・ソーヤーの冒険』　マーク・トウェイン著

（どなたの翻訳でも構いません）

参加希望者は「子どもと大人の読書会・参加希望」との表題で、左記メールアドレス宛にお申し込みください。

申込先：zoom@kodomonohon.org

○講座　子どもの本とは？

②大人の本と比較して　課題本『高瀬舟』

日時　12月20日（水）10時～12時

場所　熊本市立図書館集会室

森鴎外という名前は、みなさん学校の教科書等で一度は目にされたことがあると思います。『高瀬舟』は、文学史のなかで問われることの多い作品ですので、一緒に味わってみませんか。

（担当　古家直美）.

○講座　昔話はおもしろい！

日時　２０２４年1月17日（水）10時～12時

場所　熊本市民会館シアーズホーム夢ホール　第1会議室

昔話が、子どもにも大人にも楽しくワクワクと感じさせるのはどうしてなのか、日本の昔話を例に挙げて皆さんと考えてみようと思います。また、熊本の昔話もいくつか楽しみたいと思っています。

（担当　辻由美）

※講座の参加申し込み方法は8ページの「12月、1月の講座・会合の案内」をご覧ください。

◇お知らせ　**『神話的時間』の電子版**

鶴見俊輔先生の講演会録（１９９２年5月）が収蔵されている『神話的時間』（熊本子どもの本の研究会編）は電子版（kindle版）でも購読することができるようになりました。また、Kindle Unlimitedに入会されている方は、会員特典として追加料金なしにダウンロードすることができます。多くの方にお読みいただければと思っております。

『神話的時間』の構成

「神話的時間」（鶴見俊輔）、「ノートブックから」（鶴見俊輔）、【対談】お二人に聞いてみたいな」（谷川俊太郎、工藤直子）、【鼎談】一〇〇万回生きる方法」（佐野洋子、谷川俊太郎、西成彦）

12月、1月の講座・会合の案内

○子どもと大人の読書会（オンライン）
・日時　12月10日（日）10時～12時
課題本『僕は上手にしゃべれない』『トム・ソーヤーの冒険』

○第5回研究会活動検討会（オンライン）
・日時　12月17日（日）10時～12時

○講座　子どもの本とは？
②大人の本と比較して　課題本『高瀬舟』
・日時　12月20日（水）10時～12時
・熊本市立図書館集会室

○講座　昔話はおもしろい！
・日時　2024年1月17日（水）10時～12時
・熊本市民会館シアーズホーム夢ホール

○おはなしボランティア「びわの木」
・日時　12月2日（土）11時～11時20分
熊本市立図書館（3歳児以上）
・日時　12月21日（木）11時～11時20分
熊本県立図書館（1、2歳児）
・日時　12月23日（土）14時～14時20分
熊本県立図書館（幼児・学童）

★講座参加には事前申し込みが必要です。講座名、参加者のお名前、連絡先を明記の上、メールでお申し込みください。場所、スケジュールについて、お越しになる前に必ずホームページでご確認ください。
メール　kouza@kodomonohon.org

★オンライン会合への参加希望者は左記宛にご連絡願います。　メール　zoom@kodomonohon.org

本はともだち！

10月に第3巻（喝采か沈黙か）が出版された『レーエンデ国物語』（多崎礼　著、講談社）は、今年の私の一推しファンタジーです。副題無しの第1巻が今年の6月、第2巻（月と太陽）が8月、そして第3巻と続けざまに出ており、2024年発売予定の第4巻（夜明け前）、第5巻（海へ）で完結するとされています。

聖イジョルニ帝国の中で特殊な疫病に冒されている場所として自治的立場を有していたレーエンデは、帝国内紛争の中で帝国直轄の属領となり、苦難の歴史を歩み始めます。このレーエンデの数百年にわたる歴史の中のエポックメーキングな時代を選び、各巻それぞれ2人の主人公が時流に翻弄されながらも目的に向かってあがいてゆく生き様を描いています。想像の国の歴史を、個々のエピソードの連作で紹介していく形式は、児童文学の古典的名著ナルニア国物語を思い起こさせます。

レーエンデの象徴である幻想的な古代樹の森、満月の夜の幻魚が飛び回る銀の霧といったファンタジー的要素だけでなく、レーエンデの属領化を引き起こした周辺の国々間のパワーバランスや社会制度設定、虐げられ続けてきた人々の諦めと、ずるさと、時に生じる熱狂の発露など、本好きにはたまらない要素が満載です。第3巻の主人公の双子は劇作家と俳優兼男娼で、歴史の中に埋もれてしまっていた第2巻の主人公たちの独立運動の再発見・演劇化を目指します。演劇は繰り返し再演される忠臣蔵のように世代を超えて人々に訴え続けます。歴史の変革点のエピソードとして演劇化活動を設定した作者には脱帽です。第4巻は「爛漫な青年と塔から落とされた少女」の出会いから始まるとのこと。発売日が待ち遠しいです。

（横田真）

■編集＝金子・上林・横田　《イラスト》安田

特定非営利活動法人
熊本子どもの本の研究会　発行
〒861－8029
熊本市東区西原1丁目15の24
ファックス　096（382）5090